



TITLE:

三つの行為：「アンジェリック」を読む

AUTHOR(S):

梶川, 忠

CITATION:

梶川, 忠. 三つの行為：「アンジェリック」を読む. 仏文研究 1979, 8: 1-16

ISSUE DATE:

1979-12-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/137635>

RIGHT:

三　　の　　行　　為

—「アンジェリック」を読む

梶　川　忠

文芸用語に「額縁小説」あるいは「枠小説」と呼ばれるものがある。一つないし二つ以上の物語を含んで、それ自体が額縁あるいは枠のようにになっている小説の謂である。「デカメロン」や平安朝の「大鏡」などの古い例を挙げるまでもなく、フランス近代小説においても、すぐに幾つかの作品を思い浮べることができる。それらは二種類に分類できよう。偶然ある人に出会って、話をきくもの（「マノン・レスコー」など）と、偶然ある原稿を発見し、それを掲載するもの（「アドルフ」など）とである。

フランクフルトでぶらついている時に偶然出会った一冊の本を、「私」が探すことから始まっている「アンジェリック」¹⁾（1854年）も、探求書を求める過程で入手したアンジェリック・ド・ロングヴァルの手記を中心に構成されているので、「額縁小説」と考えて間違いではない。題名からも推察できるし、「アンジェリック」論にも、彼女を女主人公として論及しているものが多い。しかし12の書簡からなるこの作品において、彼女の手記はわずかに6書簡（第Ⅳの手紙から第Ⅸの手紙）を占めるにすぎず、さらに該当部分も手記がまるのまま掲載されるのではなく、「私」の説明、余談などが挿入されている。「アンジェリック」において、彼女の手記は、「私」の探究の過程での一エピソードに過ぎないものである。絵を飾るための額縁が、絵よりもくっきり浮び上っているのだ。

実際アンジェリックの手記を発見し、波瀾の人生を再構成しようとする「私」は、彼女個人よりも、次第に彼女を生んだヴァロアそのものに興味を持っていく。ヴァロア地方を母国とする「私」には、その題名にもかかわらず、常に自分への関心がある。

だから「アンジェリック」も、彼女の手記を別にすれば、ネルヴァル後期の作品に共通する語り手＝主人公である「私」を中心にした、きわめてネルヴァル的な作品になっている。

「アンジェリック」には三つの作品がある。

1. 1850年10月24日から12月22日まで、『ナショナル』紙に、26回にわたって断続的に連載された「塩密売人 — ド・ビュコワ神父の物語」
2. 1の10月24日号第一回、25・26日号第二回、11月2・3日号第六回から12月7日号第十八回までの部分²⁾にほぼ対応する「アンジェリック」³⁾（この稿で扱われるもの。）
3. 「アンジェリック」で題のみ告げられた「ド・ビュコワ神父」（p. 162）⁴⁾。フランクフルトで出会った本を入手していたら書かれたはずの作品であり、そうならば「アンジェリック」は存在しなかったはずである。「アンジェリック」は、この作品の書けない事情を述べた作品になっている。

2と3はトランプの裏表の関係にあり、一方が他方を排除する。トランプは決定的に裏返され、「アンジェリック」が存在することになった。（1は2と3を包み込んだような作品であるが、現実にはネルヴァルが二つに分け、一方をジャーナリスト的な意味合いからにせよ、「アンジェリック」と改題して刊行している以上、1はプレオリジナルの価値しかもたない。）

12の書簡という体裁をとった「アンジェリック」は三つの部分に分けることができる。

I—IIIの手紙 — 「私」が一冊の本を求めて図書館を廻ること。

IV—IXの手紙 — アンジェリックの駈落ちの顛末。

X—XIIの手紙 — 「私」のヴァロア地方散策。

3—6—3に分けられる三部分を通して、主人公「私」の遍歴とアンジェリックの駈落ち（ここから「歩く」というテーマが生じる）、彼女の書いた手記と「私」のいかに書くかという問題（ここから「書く」という行為を検討することになる）、二人によって同じ軌跡を描く二つの行為を中心に、「アンジェリック」を読んでもらうこと。そして「書く」という行為から、この作品を特異なものにしていると判断される「名付ける」という行為が生じるのである。

歩くこと

ピカルディ屈指の名門の出である女主人公アンジェリック・ド・ロングヴァルは、「沈んだ、夢見がちの性格」（p. 180）だったけれど、自己の運命に敢然と立ち向

う強さを持っていた。ルイ13世の時代に、彼女は生地を離れることなく、ヴェルヌイユあるいはサン・リモーの城に住んでいた。三年間プラトニックに愛し合った身分の低い男が、その愛故に主人である彼女の父親の勘気を蒙り、彼女に駈落ちを勧める。父を愛しているアンジェリックは「この愛情を捨てる決心がつくために、できるだけのことをしてみました。しかし、そのあとで私(＝アンジェリック：筆者註)が嘗めたあらゆる辛酸が、出発に先立って、私の眼の前に見えておりましたのに、それでも私には、この愛情を捨てることはできませんでした。」(p.198)だから運命を受け入れ、彼女は当のしない逃避行に出立する。実際出発後の彼女らを語る「私」は、一個所に留ることなく流浪し続ける彼女らの、土地土地でのエピソードに重点を置いている。

行くこと。とにかく行くこと。作品内に指摘されてはいないが、どこかを目指して進むこと。二人だけの生活を送るためにではあっても、具体的な方針を持たずに歩くこと。一旦螺子を巻かれた玩具は完全に発条が戻るまで動き続けなければならない。コンピエーニュ、シャラントン、エッソンヌ、リヨン、アヴィニオン、ツーロン、ジェノヴァ、ローマ、ヴェニス、パルマ・ノーヴァ、ヴェローナ、インスブルック、ヴェローナと、歩くことを余儀なくされた彼女らの逃避行は続く。

しかも運命は彼女らに味方しない。フランス国内では、洪水、負傷、突発事故などが、彼女らに足止めを食わせる。ジェノヴァへ船出すると暴風が襲い、難破しそうになる。ローマでは失敗したけれど、パルマ・ノーヴァでは結婚することができた。イタリアでは「何を待っていらっしゃるのですか？……あなたの生涯の残りを、彼とみじめに暮そうというのですか。」(p.205)と傍から言われるような希望のない生活であった。

だが、いとこの修道僧によって魔法にたぶらかされたと判断されるような行為で、彼女が幸福になるかどうかは問題でない。歩き続けることが必要なのだ。歩き続ける間、男は徐々に生彩を失い、自己崩壊をおこすけれど、彼女は自己を律し、運命的な愛に生きていく。彼女が残した手記には、この愛にのみ生きていた時期しか書かれない。彼女らがフランスへ帰る決心をし、途中で男が死んでも、彼女は書き記さない。だから故郷へ帰り、歩行をやめた彼女は、4年後に死んでしまうのである。

偶然から自分の未来を振って、歩き始め、所期の目的を達することなく、歩行そのものに生きたアンジェリックのように、「私」もまた、偶然出会った一冊の本から予想もしない歩行を始め、歩くことが目的になってくる。男への愛、執着に生きた彼女に対し、「私」が愛し、執着するのは書物である。(だから「アンジェリッ

ク」は書物に関する漫筆である。)

「アンジェリック」は以下の文章で動き始める。

1851年のこと、私はフランクフルトを通りかかった。— かねて知っていたこの都市に二日も足を止めねばならぬことになり、といって別にすることもなかったのもので、その時大道商人がいっぱいに店をひろげていた主だった通りから通りへと歩きまわってみた。(p.160)(下線筆者)

歩くことから、何かが生れてくる⁵⁾(さらに余儀なくその歩行が停止され、別の歩みが派生的に生じる。)目的を持って歩き始めたのかもしれない。何かに到達するために歩き始めたのかもしれない。しかし常にそれを意識して歩いているのではない。あるいは途中の景観に見蕩るのか、あるいは生理的な道草癖の持ち主なのか、派生的に歩行そのものが目的になってくる。だから「私」の歩行は脱線続きの曲線を描くことになる。

「私」はフランクフルトで見掛け、買わずにすました「世にもまれなる出来事、あるいは神父ド・ビュコワ伯爵殿の物語、特に司教裁判所とバスチーユからの脱出記。詩と散文の数篇の作品、ことに『女性の性悪論』を付す。」という題の一冊の本を求めて、パリの図書館を廻る。それをもとにして「とりとめもない翻案読物」(p.162)を書くためにである。しかもそれを緊急に見つけ、12の書簡の宛先である『ナショナル』紙に書かなければならない。「早く題をきめろとせき立てられたときに、私は『ド・ビュコワ神父』という題をお伝えした。」(同上)フランクフルトで無理にも購入していたら、この書簡からなる作品は書かれなかったかもしれない。

「私」の書籍探索行は決して必死のものではない。返って緊急事態を楽しみ、探索行そのものに喜びを見出している。途中で「私」の目の前に現れることがらに惹きつけられる。国立図書館では1709年の警察の報告書に関心が移ってしまう。アルスナール図書館には、行こうと思うが、不思議な物語を思い出して止めてしまう。古い本屋を訪れる時には、小鳥屋の出来事に本と同様の関心を示してしまう。フランス古文書館では、ド・ビュコワ神父の大伯母アンジェリックの手記を抜き書することに専心する。徐々に罫いの輪は縮まりつつあるが、中心には到らない。むしろ本は競売でしか手に入らない可能性が強まり、「私」の積極的な探究は頓挫してしまう。「私」一個の力では不可能となり、時を待たねばならなくなる。歩くことを

止め、待つ状態を甘受しなければならないが、この探索行から、別の歩行が自然に発生してくるのである。フランクフルトの散歩から本の探索行が結果し、探索行からコンピエーニュ行が生じるのである。一冊の本に関連して「私」の発見したアンジェリックの手記、その抜き書をつくって「忠実な梗概によって綴り合わせる」(p.179)ためには、コンピエーニュの図書館へ行かねばならなくなる。

万聖節の前日に着き、コンピエーニュの愛書家宅で「ルソーが作曲し、自分の手で書きとめた民謡集」(p.180)を見て、「私」はエルムノンヴィルへ行こうと考える。一冊の本との出会いが、「私」の以後の歩行の原因になったように、「私」の歩行はいつも書かれたものから由来する。一冊の本が、その本の探索行。アンジェリックの手記がコンピエーニュ行。そして民謡集がエルムノンヴィルの巡礼へ。こうして「私」は、アンジェリックの生きた土地、「私」の「母なる大地」(p.189)故国という聖域を歴訪し、最後にアンジェリックの住んでいたロングヴァルを目的地とする歩行を開始する。

出掛るにあたって、唐突に、

私は、以下でそのあだ名をとってシルヴァンと呼ぶつもり、一人の友人を連れてでなければ、この地方を旅しないことにしている。(p.215)

と言明し、アンジェリックが運命的に男と結びつき、一緒にヨーロッパを彷徨するように、「私」にも相棒が要る。Sylvin という名前からすぐに sylvain が連想される。ラテン神話における森の神。

それは、この田舎では非常にありふれた名前だ。 — その女性形があの優雅なシルヴィで、 — シャンティの森の花束のおかげで世に知れわたっている名前である。詩人テオフィル・ド・ヴィヨーがあればほどしばしば夢にふけりに行ったシャンティの森の。(同上)

こうしてシルヴァンと呼ばれる友人は、豊かな森に囲まれたこの地方で、「私」を導くのに最適な同伴者になる。彼は、「私」が育った土地に留まったならなった人間、いわば「私」の分身である。エルムノンヴィルへの巡礼を兼ねた聖地ヴァロアの散策を恙無く成し遂げるには、特殊な人間が必要なのだ。普通の同伴者であれば、「私」の気紛れに付き合っ、無事にヴァロア地方を通り抜けることができない。

何週間か前のことだが、そのとき、私はすでに、あなたが掲載してくださろうという仕事に着手しており、その名前が幼年時代の思い出のように私の心の中でいつもこだましていたビュコワ一族について、何回か下調べのための旅行をしていた。(p.187)

「私」はブルターニュ生れの友人と、やはりサンリスからエルムノンヴィルに行く予定を旅館に話しておく。だが「考えが変わり、私たちは、私たちをパリのほうへすこし連れもどすシャンティ行きの馬車の席を取りに行った。」(p.188)そこへ士官が現われ、証明書を持たない彼らは逮捕されそうになった。だからシルヴァンと出掛るにあたって、「私」が気紛れにシャンティ行きを提案すると、彼は脱線に応じず、予定に従わせる。「『そんな風に行先を変えたために、すでに一度、あなたは逮捕される目にあいそうになった。——突然に考えを変える連中は、とかくうさんくさい人間と見られるからな……』」(p.215)

予定に従って、分身に導かれながら、「私」は森や叢林や砂漠の中に忽然と浮かび上がる過去を求めて、モン・レヴェク — シャーリ — エルムノンヴィルと歩んでいく。シャーリは「ながらくうち捨てられている城」(p.223)であり「廃墟の一群」(同上)である。エルムノンヴィルは伝説に溢れた土地であり、その城は「アンリ4世の時代に造られ、ルイ15世の頃に修築された建物だが、おそらくは、さらに以前の廃墟の上に建てられた」(p.228)という、建物そのものが過去の集積になっている。サンリスで漫歩の途次出会った少女たちから、自分の過去が思い出されたように、「私」の散策そのものが、ヴァロアの過去を掘り起し、「私」の母なる大地、聖なる土地を、「私」により強く所有させることになる。

この散策は上手いきそうである。シルヴァンのおかげで、脱線することなく歩くことができた。しかし「私」にとって歩くことは、最終的には目的地へ着くにせよ、曲線的でなければならない。エルムノンヴィルの森を通して、ヴァロア地方を去ろうとする時、「私」たちは、ヴァロア娘たちによって道を迷わされる。「いい加減なことを教えた娘たちのせいで、私たちはじつにおかしな道に入りこんでしまった。」(p.230)「私」一人なら、この脱線を楽しんで森の中を、どこまでも歩き続けるかもしれない。「道はまるで悪魔のように延々とつづいた。いったい悪魔というものがどこまで延びるのか、良くは知らないがね。」(p.231)だが分身シルヴァンが、「私」の気を悪魔からそらして、森を抜けさせてくれる。ただし聖地の分身は聖地に残らねばならない。「故国の土をたくさん靴底につけて運んでいっ

たのだが、その先の草原で、その土を大地にお返しした。」(p.232)土くれまでも、聖なる土地から持ち出すことはできないのである。アンジェリックの相棒が途中で脱落したように、「私」の相棒シルヴァンもダマルタンで姿を消す。

そして取って付けたように、「私」をコンピエーニュからヴァロア地方へ向わせた原因、ド・ビュコワの一族の揺籃の地が、この旅の目的地であったことが告げられる。「私」は「小説的な作品に魅力を与えることができ、歴史の実証的観点から見ても無益でない土地」(p.239)、書くという行為に移るためのスプリングボードとなるはずの場であるロングヴァルの廃墟に到り、「私」の散策行も終りを告げるのである。

しかしこの散策行の最終地点は、偽りであった。「私の探訪旅行の目的は今や達せられた。(…)私はビュコワ一族の揺籃の地ロングヴァルへたどり着くことができた。これこそ、あの麗しのアンジェリックが住んでいた場所(…)」(p.238)と感激の面持で書き記しているが、アンジェリック・ド・ロングヴァルは普段ヴェルヌイユに、父の不在の時はサン・リモーに住んでいた。故国に戻ってからは、ニヴィリエに隠遁していた。だからアンジェリック個人の思い出の地ではない。ド・ビュコワの一族を知るには、必要であったかもしれない。だが問題はそこにはない。ロングヴァルという名前につられた単純な誤りではない。目眩をかけることにより、彼女の思い出の地を宙づりにし、「歴史の実証」性をからかい、「私」の探訪旅行の目的地を虚くすることである。「私」にとって重要なのは、目的地に到ることではない。紆余曲折にみちた空間移動である歩行によって、一瞬一瞬の現在に自分を生かし、その現在を豊かに捉えることである。そこから付随的に、歴史の最奥に沈み込んだ無名の女性を掘り起した。歴史を装い、歴史の桎梏から女性を解放し、歴史的個人にヴァロアの女という点から分析を加え、普遍的なヴァロアの女にすることで、「書く」というレベルに遷らせたのである。

書くこと

「アンジェリック」も、ネルヴァルの後期の作品を特徴づける語り手と主人公という二つの機能を持つ「私」によって語られているが、「序」に書いた以外にこの作品を他から弁別する特徴として、作者の直接介入の多さが挙げられる。例えば「アンジェリック・ド・ロングヴァルの重大な決心の話をする前に、ここでまた一言口

をはさむことを許していただきたい。そのあとでは、もはや、めったに話を途切らせたりしないつもりだ。」(p.194)という文章のように、アンジェリックの生涯を語りつつ、自由にヴェロア地方の俗謡を挿んだりして、作者は少しも一貫した物語を語る気持を持っていない。作者は思い付きのままに筆を運び、書いている「私」と書かれている「私」は、ほとんど時と所を同じくしている。

これは自分の現在を特定の相手に語るという書簡の形式を活用している所為もあるが、この書かるべからざる作品を書きつつ、過去を語るという物語の機能を破壊していたからでもある。この今ここにという一点を軸にして、そこから過去への連想が働く時、様々なエピソードが生起する。書くという行為は、過去と現在の間を揺れながらジグザグに進んでいく。

それは、物語という点から見れば、「オデュッセイア」のイタカが「50人の求婚者にとりまかれ、昼に織った布を夜には解いていた」(p.239)ように、創造と解体を繰り返すことになる。「小説的潤色」(p.173)が欠けていてもかまわない。「私」は歩行の途中で生じることを正確に書いていくだけだ。「私は、ド・ビュコワ神父を求めて乗り出している旅の経過をあなたに刻々に知らせようと思っている。」(p.166)

だから語り、書きつぐ「私」は、歩く「私」と同様、つねに中心に到ることなく、逸脱を繰り返していく。いやむしろ中心は失われ、「私」はどこへ書いていくべきか目的を持っていないというべきだろう。「交響曲では牧歌的なものの場合でさえも、(…)第一主題を、ときどきくり返していった、ついにそれを、フィナーレで、全楽器の段階的に高まる嵐とともに、高らかに鳴りわたらせるのが良いのと同じように」(p.220)、小説もフィナーレに向って主要主題が徐々に高まっていくものであるなら、「アンジェリック」はそれに反逆し、「フィナーレはなおもあとへと延」(p.221)ばされ、常に外へ外へと逸れながら、ついに鳴り響かずに消滅する。それ故「アンジェリック」は小説を構成する因子同士の関係が稀薄で、派生的、挿話的なものでつくられることになる。この作品では、いかに語りを展開するか、いかに書くかが重要になる。「私」はまず書くことから始める。書き続けることによって、そこから何かが生じてくるのである。

こうして「アンジェリック」は、即興を基調に、余談、繰り返し、混乱、時間の無視などで織りなされ、自己増殖を続ける語り口を持つことになる。特に連想から生じる挿話の多さが目立ち、各手紙にはそれが、次々に鑑められることになる。主な挿話を分類すると次のようになる。

1. 「私」の思い出にまつわるもの
 - A. 本に関する逸話
 - 魔法の呼び鈴（第Ⅲの手紙）
 - 二月革命時の愛書家（Ⅹ）
 - 二人の愛書家（Ⅺ）
 - B. 「私」の体験から生じる思い出 — ヴァロア地方
 - 逮捕されそうになること（Ⅴ）
 - デルフィーヌ（Ⅶ）
 - ルソーの思い出（Ⅻ）
2. 「私」の当った書類から生じたもの — 歴史の領域
 - ル・ピルール事件（Ⅱ）
 - アンジェリックの物語（Ⅳ, Ⅵ, Ⅶ, Ⅷ, Ⅸ）

この一貫性を欠き、断続するエピソード群の、いずれかに比重がかけられるのではない。アンジェリックの物語が最重要に思われるが、これとて分断され、物語内の緊張関係より、そこから生じる「私」の連想の方が、重点的に書かれている。だからアンジェリックの人生を語るのに、「私」は物語を中断する。読者を惹きつけ、一気に物語の中にのめりこませようとは決してしない。むしろ女主人公としての彼女を無視し、個性を持った女であることを拒否する。「私」はアンジェリックのなかに、聖地ヴァロアの女を見出し、それに関する考察を披瀝するのに熱心である。（それからヴァロアそのものの考察に発展する。）

物語を持った小説は書けない。「私」は小説を書くことを自らに禁じる。自分の、新聞に書くものが「新聞＝小説」に分類され、罰金を課される恐れがあるのだ。フランクフルトからパリに帰ると、フランスの文学界はパニック状態だった。

パリに帰ってみると、文学が名伏しがたい恐怖状態に陥っていることがわかった。リアンセイの新聞法改正案が通った結果、議会が勝手に「新聞＝小説」と呼ぶことにしたものを、新聞に掲載することが禁じられてしまっていたのである。（p.161）

幼少のころから名前を耳にし、全く知識がないわけではないド・ビュゴワ神父について、歴史小説は書けるから、「私」はフランクフルトで本を買わなかった。だが『ナショナル』紙に「新聞＝小説」である歴史物を書くことは出来ない。書ける

のは、ド・ビュコワ神父に関する歴史でしかない。こうして一冊の本を求める旅が始まり、「私」はその道中を正確に書こうとする。「私」は書きつつあるものを小説にしようとは考えない。それは記録であろう。

むしろ「小説」≪roman≫という言葉に嫌悪を示し、皮肉にしか使用しない。編集長から題を求められた時、「この人物についてならば、小説的にではなく、歴史的な流儀で（……）物語るために必要な資料が、パリですぐにもみつかるだろうと思ひこんでいたのだ。」（p.162、下線筆者）と考えて「ド・ビュコワ神父」と決めた。国立図書館で、探求書が小説に分類されているかもしれないと聞かされて、「私はふるえ上がる、『小説のなかに？……でも、これは歴史の本ですよ！』（p.164）と叫んでしまう。「警察諸記録集」のなかに「ル・ピルール事件」の書類を見つけ、それを報告する時、「これは、小説ではない。」（p.171）と断りをつける。マザリーヌ図書館で、デュマのような歴史小説を書くために入用かと尋ねられ、「『そんなものは、書いたことがないし、書こうとも思いません。』（p.174）と、「私」は答える。

だから「私」は作家である（「私はただ単なる作家にすぎません」（p.189））が、小説家ではない（「小説家ではない私自身」（p.162））と自分を規定し、さらに「私はまったく貧弱な史家でしかない」（p.225）と考える。つまり想像力を弄ぶのではなく、事実に基いて物を書く人間と、自分を思わせようとする。そして問題の人物ド・ビュコワ神父は実在を確認されなければならない。1709年の警察の報告を調べ、ド・ビュコワ神父の名前を見つけた時には、「確実な歴史的実存性」（p.168）を国家に保証され、「いかなる法廷も、もはや彼を新聞＝小説の主人公の部類に入れる権利を持たない。」（同上）ことを喜ぶのである。

こういう姿勢をとることになった以上、アンジェリックが恋人の「いくつかの不幸な性向」（p.207）を認めながらも、批判することなく、「事実をたしかめるだけにとどめ」（p.208）たように、「私」も事実を、つまり歩行と調査のみを書き綴ろうとする。神父を求めて歩き廻る自分（少くとも完全に自己の体験的事実として提示できる）と調査・探究の過程で付随的に入手した資料（フランス古文書館等のものだから、過去の歴史に属する事実とみなしうる）を、「行きあたりばったり」に、しかし、確実な材料にもとづいて、あなたにご報告する」（p.226）だけである。だから過去の人物を描くのには、年代記作者の「フロワサルやモンストルレ流に、事実を登場させることだけが、私に許されているのだろうか。」（p.173）と考えるし、「私」の歩行に伴い、「あわただしい田舎回りの旅中のこととて、私が

つついといくつかのまちがいを書くかもしれないという点を、どうか考慮に入れておいていただきたい……」(p.219)と念を押してしまうのである。経験に基いた記録に徹しなければならない「私」は、問題の神父に関して大雑把な知識で書けると、本屋に口をすべらし、「『——それにしましても、それで歴史が書けるものですかなあ!』」(p.234)と皮肉られさえするので、ますます「ド・ビュコワ神父の正式の物語・歴史(histoire)」(p.233)を入手しなければ、一文も書けなくなる。名前だけは、警察等の制度によって保証されるが、ド・ビュコワなる人間そのものは、制度の承認をまだえていない。「私」もまだ正史風を書くことはできない。

勿論「私」はド・ビュコワ神父を、客観的歴史として書く気はない。リアンセイ法案に抵触しなければいいのである。「私」は制度に逆わず、従う振をするだけだ。「新聞＝小説」は書かない。想像力に依らない歴史、あるいは漫筆＝非小説的文章。「アンジェリック」を構成する12の手紙の宛先人にあたる『ナショナル』紙編集長に、「ド・ビュコワ神父」は渡されることになっている。約束により新聞に書き出す時、「私」は勿論本を持っていなかった。だから「アンジェリック」に歴史「ド・ビュコワ神父」はない。むしろ作品の最後に、「ド・ビュコワ神父の物語・歴史は、『幻視者たち』(パリ、ヴィクトル・ルクー版)と題された私の書物で、お読みいただくことができる。」(p.240)と記して、最終的に競売によって本は入手したのに、「永遠に逃れ去ろうとする人物」(p.166)である神父そのもののように、歴史を作品中から逃亡させている。だから「アンジェリック」は、本を入手するまでの時間稼ぎのために書かれた漫筆の体裁をとっている。そして作品内で、歴史を逃亡させ、ド・ビュコワ神父を宙づりにすることで、彼の周辺をめぐりつつ、なにも書かないように書くという行為が遂げられるのである。

名付けること

「私」がアンジェリック・ド・ロングヴァルに興味をいだいたのは、聖地ヴェロアに生れた所為であるけれど、彼女が親に反抗し、制度と抵触した所為でもある。連れの男は、フランスに戻れば、処刑されるはずだったし、彼女も帰国以来「一家の中ではよく思われていなかった。」(p.214)帰国して4年後に貧窮のうちに死んでしまう。彼女は一家から、制度から拒否され、「彼女の系図の中に、彼女の名さえ見当たらない。」(同上)誕生時につけられ、社会的に認知された名前、それ

によって自分と社会との関係を維持していた名前を、社会的に抹消されてしまった。「黄ばんだ紙に薄れたインクで書かれた百ページばかりの草稿で、その紙片は褪せた薔薇色の絹のリボンで束ねられており、中身はアンジェリック・ド・ロングヴェールの物語なのである。」(p.179) 作品内に初めて彼女の名前が登場するこの文章から、「私」は彼女の話がこの手記や他の資料によって語ったうえ、最後に彼女の名前が否定されたことを告げるのである。

さらにアンジェリック自身も同じことを行っている。彼女を歩くという行為に引摺り込んだ男の名前を決して書き記さなかったのだ。「彼女は一度もラ・コルビニエールの名を書いていない。私たちがその名を知ったのは、ただただアンジェリックのいとこのセレスチン会修道士の物語によってであった。」(p.197, 原註) 彼女は冷静に「自分の愛情が、私たちがフランスを発ちました時と変わらず、大きいことを常に感じておりました。」(p.211) と書きながらも、心の底には感情の乱れがあったのだろうか。客観的に見詰ようとしている自分たちの過去の行動、その手記の主演の一人で、彼女が知悉していたはずの男の名前を、どうして書かなかったのか。「彼女がけっして名を書かない男」(p.208) であるラ・コルビニエール。アンジェリックは眼前に見、共に生き、自分の運命を托した男の名前を決して筆にしなかった。

なるほど人名というものは、他の固有名詞同様、言語体系の中では手付かずのまま放置され、無制限に存在し、言語体系を利用してその名前を知る手段を私たちは持たない。即ち名前を知ること、人物を見知ることになり、人名を書く(知っているのに書かない)のは、普通名詞を書くのとは違った意味を持っている。さらにある人名を知っていることには、無限の段階がある。勿論アンジェリックは、もっとも深くラ・コルビニエールを認識しえた立場にあり、恐らく父母と並んで、彼は彼女のもっともよく知っていた人間である。そういう人間＝名付けられるものに、書く作業において、人名＝名付けるものを付与しなかったのはなぜか。

もっとも作品の背後に、彼女の心理を探ることが目的ではなく、名付けられるものと名付けるものの揺れを、固有名詞のなかで考えてみたいのである。

ド・ビュコワ神父という名で呼ばれるべき人間、この作品内に存在しない人物についても揺れが起っている。第10の手紙で、「私」は人名事典風に、神父の経歴を不明な部分もあるが紹介した(ただし「私」の最も興味をもった出来事には少しも触れない)⁶⁾ のに、肝腎な名前の綴りが幾つもあるのだ。「私たちはすでにビュコワの字綴りを5通り知っている上、ここに Busquoy という6番目のを得たわけだ。」

(p.216, 原註) 言うまでもなく、「私」は「古い名前には綴字のきまりがない」(p.216)のは知っているし、求める人物の綴字が、de Bucquoyであることを信じている。が、本を探している時、司書が色々なカタログを調べ、綴字の違いを指摘すると、「私」は様々な可能性を否定するだけの確信をもち得ないのである。de Bucquoy, du Bucquoy, Bucquoy, Dubucquoy, Bucquoi, Busquoy. 6の可能性による混乱をむしろ楽しみながらも、「私」は一つには決定しかねている。つまりド・ビュコワ神父と呼ばれる実在の人物＝名付けられるものに、付与すべき名前＝名付けるものが曖昧なのである。

そして系図から抹消されたアンジェリックについては、アンジェリックという名で呼ばれた人物＝名付けられるものから、その名前＝名付けるものが公式に奪い去られているのである。

以上は名付けられるものに対する、名付けるものの揺れである。この関係は反対の方向にも働いている。

「私」はド・ビュコワ神父について、他の文献からノートを取り、知識を少しは増やしているのに、その過程で出会った「驚くべき出来事、16年間にわたるインド旅行記」(p.167)という Jacques de Bucquoy の著した本を、「私」の求める人物に関係があると、疑いながらも思うのである。

「それじゃないなあ。……でも、その本はド・ビュコワ神父の生きていた時代と関係はあるね。ジャックというのは、たしかに彼の名だよ。それにしても、あの気まぐれな神父は、何をしにインドくんだりまで出かけたのかしら？」
(同上)

ジャックという名は、「私」の求める人物のものではない?) 「私」にとって、神父の名前＝名付けるものが曖昧で不分明なのに対して、「私」は探究の途中で、人物そのものに変形を強いることになる。インド旅行が「私」に食い込み、「私」の認識を曇らせることになる。つまり名付けられるものに歪みが生じるのである。

この歪みは作品そのものにまで及んでいる。「ド・ビュコワ神父」という題を『ナショナル』紙に通知し、書くことにはなったけれども、ド・ビュコワ神父に関して余り知識がない以上、歴史的に書くことはできない。この八方塞りを逆用して、ド・ビュコワ神父を語らずに、ド・ビュコワ神父について語ることにする。つまり「ド・ビュコワ神父」の題は、「ド・ビュコワ神父を書いた一冊の本」をめぐって書く

この意味になり、書かれつつあるもの＝名付けられるものに、「ド・ビュコワ神父」＝名付けるものが大きな歪みをもたらすのである。

このずれの最大のものが、「ド・ビュコワ神父」の題を持ち、歴史上の知られざる人物について、歴史的に語ると主張することによって、議会が禁止した「新聞＝小説」を書くことであろう。つまり「私」の書きつつあるもの＝名付けられるものによって、「奇妙に結びつけられた二つの単語」(p.162)(既成の言語体系の中で調和しないから、固有名詞風になっている)である「新聞＝小説」＝名付けるものに不意打ちをくらわせ、空中につりさげること。ド・ビュコワ神父がその名辞の曖昧さを通して、自己と社会との間に固定さるべき関係に混乱を与えたように、この作品は、制度が生み出した「新聞＝小説」をゆさぶり、言語を虚ろにする試みであった。制度に対する搦手からの攻撃。

制度とは、具体的には法、社会、言語等だが、それらを通してより強く人間を決定し、規制するものである。それは幻想を真実に錯覚させる。具体的な現れを相対的視点から見れば、直接的な反抗は重要でない。

サンリスから証明書を持たずにさ迷おうとして、逮捕されそうになったことはすでに述べた。放浪は禁じられた行為である。「『権力者に物を言うすべは心得ている』」(p.188)「私」は、士官にとって絶対である証明書を相対化して、逃れようとする。たとえ逮捕され、法廷に出頭しても、「『告白します！ 悔い改めます！ 誓います！』」⁸⁾と叫んで悔い改めるふりをするだけであろう。

一冊の本の探求から始まった歩行が中断し、「私」は派生した歩みの目的地を宙づりにすることで、彷徨した。細部を全体から独立させ、部分的な情景を自立させることで、なにも書かなかった。固有名詞(的なもの)と「もの」の間にずれを生み出して、混乱を出来させた。

歩く、書く、名付けるという三つの行為により、軽いジャブを繰り出しながら、制度を窺うこと。それは決して真剣であってはならない。同一化された自己でなく、様々に分裂した自己が様々なレベルで動く時、ユーモアが生れ、悲しい余裕が生じる。

しかしそこからの一步はまだ踏み出すことができない。

1. LES FILLES DU FEU / Nouvelles / Par Gérard de NERVAL / Introduction / Angélique / Sylvie (Souvenir du Valois)/Jemmy / Octavie / Isis / Corilla / Emilie / Paris, / D. Giraud / 1854.
2. 第19回以降は、ド・ビュコワ神父の話を取り扱っており、*Les Illuminés*(1852年)に *Histoire de l'abbé de Bucquoy* と題して収録されている。
3. 「火の娘」は女性名を題に持つ7つの小説から成っており、収録に当たって、「アンジェリック」の題をネルヴァルは採用した。
4. 引用は全て《Pléiade》版 *OEuvres I* により、翻訳は「ネルヴァル全集Ⅱ」(筑摩書房、1975年)所収の入沢康夫訳であるが、文意によって改変した箇所もある。
5. ネルヴァルの晩年の諸作品は、歩くこと、あるいはそれへの欲望から始まるものが多い。(強調筆者)
 《Avec le temps la passion des grands voyages s'éteint, qu'on n'ait voyagé assez longtemps pour devenir étranger à sa patrie.》(OE I. P. 79) (*Les Nuits d'Octobre*)
 《Il est véritablement difficile de trouver à se loger dans Paris. (...) Arrivé d'Allemagne, après un court séjour dans une villa de banlieue, je me suis cherché un domicile plus assuré que les précédents.》(OE I. P. 121.) (*Promenades et souvenirs*)
 《Je sortais d'un théâtre où tous les soirs je paraissais aux avant-scènes en grande tenue de soupirant.》(OE I. P. 241) (*Sylvie*)
 《Ce fut au printemps de l'année 1835 qu'un vif désir me prit de voir l'Italie.》(OE I. P. 285) (*Octavie*)
 《Avant l'établissement du chemin de fer de Naples à Résina, une course à Pompéi était tout un voyage.》(OE I. P. 293) (*Isis*)
6. 「幻視者」所収の「ド・ビュコワ神父の物語」の中心をなすのは、パスチュー入獄と脱走の経緯である。神父へのネルヴァルの関心は、反社会性にあった。
7. Jean-Albert d'Archambaud, comte ou abbé de Bucquoy(1660?—1740?)が神父の名前である。
8. 「10月の夜」(OE. p.116) 中村真一郎・入沢康夫訳「ネルヴァル全集Ⅰ」

(筑摩書房, 1975) 所収。

参 考 文 献

I. texte

Gérard de Nerval, *OEuvres*, texte établi, annoté et présenté par A. Béguin et J. Richer, Paris, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard:

— Tome I, Cinquième édition, 1974.

— Tome II, Troisième édition, 1970.

Gérard de Nerval, *Les Filles du Feu*, texte établi et annoté avec une étude critique par Nicolas I. Popa, Paris, *OEuvres Complètes de G. de Nerval*, Tome IV-V, Champion. 1931.

II. 参考文献

CHAMBERS (Ross), *Gérard de Nerval et la poétique du Voyage*, Corti, Paris, 1969.

GAULMIER (Jean), *Gérard de Nerval et les Filles du feu*, Nizet, Paris, 1956.

JEAN (Raymond), *La poétique du désir*, Seuil, Paris, 1974.

RICHER (Jean), *Nerval, expérience et création*, Hachette, Paris, 1963.

SCHAEFFER (Gérald), *Une double lecture de Gérard de Nerval*, La Baconnière, Neuchâtel, 1977.

篠田知和基「ネルヴェルの生涯と文学」牧神社, 東京, 1977.